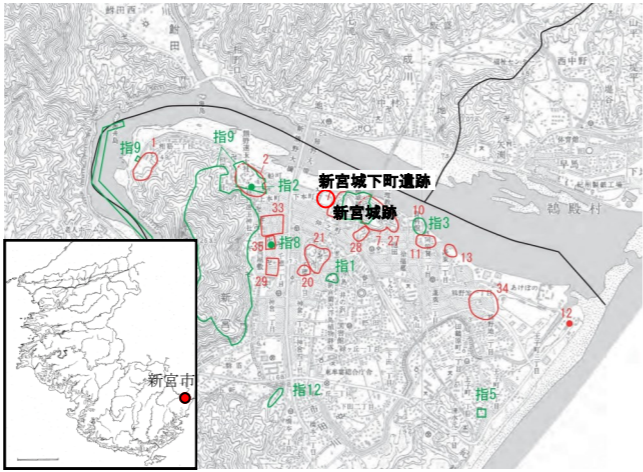


新宮城下町遺跡発掘調査
第2回現地説明会資料
 ～鎌倉・室町時代の屋敷地を発掘～

平成28年5月21日(土)
 主催 新宮市教育委員会
 (公財)和歌山県文化財センター



1 はじめに

新宮市教育委員会では、(公財)和歌山県文化財センターに委託して新宮城下町遺跡の発掘調査を実施しています。発掘調査は新宮市文化複合施設建設に伴うもので、第1次調査は平成28年2月から行っています。調査箇所は新宮城跡西側に位置する旧丹鶴小学校の敷地内で、調査面積は約1,400㎡です。

付近には縄文時代以降の生活の跡が数面にわたって残されており、第1遺構面の調査では、江戸時代の城下町の道路や石垣で区画された屋敷地などが明らかになりました。これにより、江戸時代初期の浅野期に構築された道路や屋敷境の石垣が、改修を加えながらも、ほぼ同位置に残されていることが分かりました。

その後、更に掘り下げた第2遺構面の調査では、古墳時代・平安時代末から鎌倉時代・室町時代の遺構が密集した状態で見つかりました。

2 新宮城(丹鶴城)築城以前の丹鶴山

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熊野三山への参詣は上皇・貴族により隆盛を極めます。新宮城が築かれている丹鶴山一帯は、熊野三山の一社である熊野速玉大社から阿須賀神社への参詣道沿いに位置し、古くからの要衝の地でありました。近世の編纂書(へんさんしょ)である「熊野年代記古写」を根拠にすれば、付近には、平安時代頃には熊野別当(べつとう)が別邸を築き、平安時代末頃には別当屋敷が移されたともあります。その頃に、丹鶴城の名称の由来にもなっている「丹鶴姫」が東仙寺を建てたとの記録も残り、同じ頃に丹鶴山南麓には香林寺があったとされています。また、丹鶴山周辺からは、中世墓地の遺物として東海地方の陶器類が多く出土しており、場所を移した現在の東仙寺や香林寺(宗応寺)に伝わる五輪塔(ごりんとう)や宝篋印塔(ほうきょういんとう)などの供養塔(くようとう)も、これらの墓地に係るものであるとされています。

鎌倉時代をすぎると、熊野別当の勢力が衰退しますが、熊野三山の上位の役僧である宮崎氏が東仙寺を修理し、新宮城の二之丸である現正明保育園付近を居館としたとあります。戦国時代になると堀内氏の力が台頭し、戦国時代末には丹鶴山に城を築き、麓に城下町形成を行ったとの説もあります。

3 調査の成果

調査区の東側では、底に石を据えた柱穴が集中しており、鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物がほぼ同じ位置で、何度も建て替えていることが窺えます。判っている建物では、6間×4間の規模のものがあり、当時として大きな建物と言えます。また、これらの建物群の北では、石を積んで壁を築いた室町時代の地下式倉庫も2基見つかりました。

調査区の西側では、東側ほど柱穴は集中せず、大型土坑がほぼ一列に並ぶように見つかりました。大きさは1～1.7m程度、深さ1～2m程度あり、それらの中には柱の痕跡を残すものがあるなど、大型

の構造物が存在したと考えることもできます。また、土坑の一つの底からは、小型の鏡が出土しており、地鎮など何らかの祭祀に係るものである可能性があります。

このほかの遺物では、在地産の土器類のほかに東海地方の土器・陶器類や青白磁・青磁・白磁などの中国製品が多く出土し、五輪塔や宝篋印塔なども出土しています。

4 まとめ

調査で見つかった建物や地下式倉庫は、第1遺構面で見つかった江戸時代の道路と同じ方位軸で造られています。また、道路を境として遺構の内容が異なることから、中世の町割り江戸時代に踏襲されていることが窺えます

高級品とされる遺物が多く出土することや建物規模が大きいためなどから、調査区付近は有力者の屋敷地であるとともに、供養塔が出土することから寺の存在も考えることができます。遺物の時期などから、新宮城築城以前にあったとされる寺院(東仙寺や香林寺)や、それ以前にあったとされる熊野別当に係る屋敷地の可能性があります。



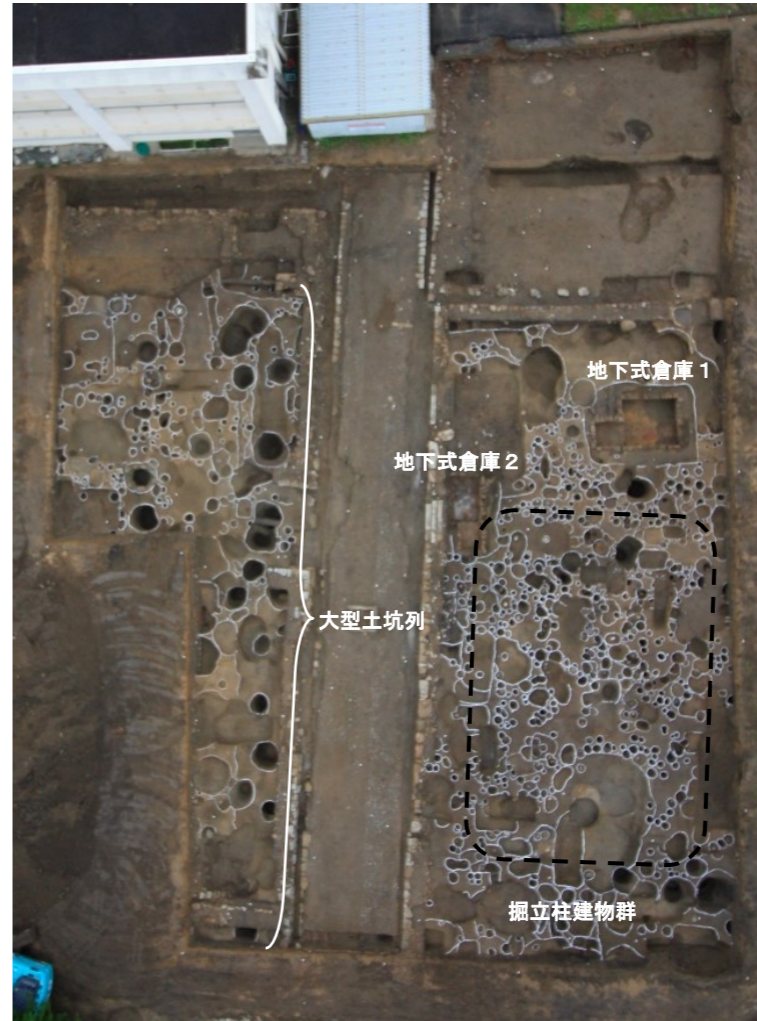
地下式倉庫1(東から)



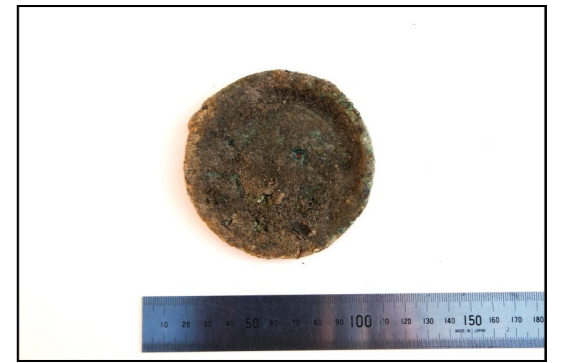
大型土坑断面(北から)



掘立柱建物群(南から)



調査区全景



大型土坑から出土した鏡(直径約9cm)